

聖家族

2013.12.29

マタイ 2・13-15,19-23

教会の典礼暦は、クリスマスの後の今日の日曜日を聖家族の祝日として祝います。このことには大切な意味があると思われます。私たちは今年も大きな喜びの中でクリスマスを祝いました。クリスマスは今や、教会で祝われる祝いであるだけではなく、このシーズンを彩る年中行事の一つとなっています。そのような私たちの周囲のクリスマスの雰囲気はクリスマスが終わると、あっという間に片付けられて、新年を迎えるための歳末のあわただしさの中に飲み込まれてしまいます。クリスマスは確かに大きなイベントであったかもしれないけれども、それはクリスマスまでのことで、それが終わるとどこかに行ってしまったかのようです。そのような社会に生きる私たちも、気をつけないと、クリスマスをクリスマスとして祝うことだけで満足してしまうことになりかねません。

私たちはクリスマスの真の意味を知っているはずです。クリスマスの夜、私たちが新たな心で私たちの中にお迎えした神のみ子は、私たちとともにいてくださり、私たちが迎えようとしている 2014 年の新たな歩みをもとにしてくださろうとしておられるのです。夢のお告げを受けたヨセフさまとともに、聖母が胸の中のイエスさまをしっかりと抱きしめて、神がお示しなるところに旅立たれたように、私たちも前途を神の計らいに委ねて、クリスマスにお迎えした主とともに新たな年を生きて行きたいと思ひます。

それにしても、今日の福音では省略されていますが、ヘロデ王が送った兵士たちの残虐な手に掛かって、いわばイエスの身代わりのように虐殺された幼子たちのことが私たちの心を締め付けます。何故、神は、ヨセフの夢に現れた天使を遣わして、ヘロデにそのような蛮行を思いとどまらせるようにはして下さらなかったのでしょうか。遠い国から、お生まれになったイエスを拝みに来た博士たちを何故まっすぐにイエスのもとに導かずに、ヘロデの王宮に迷い込ませたのでしょうか。イエスをヘロデ王の手から救い出された神は、何故、あの幼子たちの命を救おうとはなさらなかったのでしょうか。

聖書は、その初めから終わりまで、このような神に対する私たちの怒りの抗議を呼び起こさずにはおかない記述に満ちています。何故、神は樂園に蛇を創造して、アダムとエワに対して、あの木の実を食べるように仕向けたのでしょうか。何故、イエスはイスカリオテのユダを引き止めずに、みすみすあの晩餐の席から出て行かせてしまったのでしょうか。終末の裁きにおいて、何故、神

は全ての人を光のみ国に受け入れてはくださらないのでしょうか。

自分たちがベツレヘムを抜け出した後、そこで起こった出来事を知った時、ヨセフさまとマリアさまはそのことをどのように思ったのでしょうか。そのようなことさえ考えるゆとりがないほどに、マリアさまとヨセフさまは、私たちが生きる現実を生きたのです。そのような彼らが直面した現実の中にあってマリアさまとヨセフさまは、天使が告げた神の子である、彼らのイエスをその手から離すことはなかったのです。

イエスを救い主と信じる教会の信仰の中で、今日の福音のエピソードを書き記した作者は、どのような思いをもってこれを書いたのでしょうか。今日の福音を書き記した作者も、困難な宣教活動に従事しながら、迫り来る迫害の予感を覚えつつ、内部にユダヤ人キリスト者と、異邦人キリスト者との深刻な対立と相互不和を抱えた初代教会の現実の中で、イエスの十字架の死を体験した弟子たちから伝えられた、教会の信仰を後世に伝えようとしたのです。

私たちが信じる信仰は、十字架につけられて死んだイエス・キリストを信じる信仰です。そうしようと神がなさったなら、いくらでも別な仕方で人類に幸せをもたらすことが出来たはずなのに、神はその御子イエス・キリストの十字架の死によって救いをもたらしておられることを信じる信仰です。最愛の御子が、人々の手に渡され、十字架につけて殺されることを受け入れた神は、人間である私たちが作り出している現実を前に、何の力も発揮できずにいるようです。それが罪の力です。私たちのこの世界は、私たちの現実の日々は、人間である私たちが生み出す、神の介入さえも許さない冷酷で残忍な罪の力によって支配されているのです。何故、家族同士の間にも不和がるのか。何故日々、心を凍らせるような悲惨な事故や事件のニュースが報じられるのか。何故こんなにも多くの人が平和を望んでいるのに、戦争の火種は絶えることがないのか。私たちは皆、ささやかでもいいから幸せを感じたいと願っているのに、幸せを感じられないでいる人が何故こんなにも多いのか。

神がないからではありません。私たち人間が作り出す罪の力が、神の力を封じ込めようとしているのです。そのような現実を私たちは生き、マリアさまとヨセフさまも生きられたのです。そのマリアさまとヨセフさまは過酷な現実には追い立てられるようにしてエジプトに逃れ、異国の地にある間も、ナザレにたどり着いてそこでの生活がようやくにして軌道に乗ってからも、彼らのイエスを手放すことはなかったのです。これが、今日私たちが思い起こす、聖書が語る聖家族の生活です。今日の福音に語られている日々の中で、ヨセフさまとマリアさまは、彼らの間に生まれた幼子イエスさまを必死になって守り通すことによって、その御子イエスさまをこの世界に遣わされた神の御手によって守

られていたのです。

クリスマスを祝った後の今日、聖家族の祝日を祝いながら、私たちのクリスマスの祝いがムードに流されて、一時の喜びの祝いに終わることないように、心を引き締めなければなりません。私たちが今年も祝ったクリスマスが、私たちにもたらした喜びが何であったかを噛み締め直すよう、今日の聖家族の祝日は私たちに求めているのです。

今日の聖家族の祝日のミサをもって、この一年の日曜日の私たちの信仰の集いは終わりとなります。迎える 2014 年の私たちの歩みが、エジプトに向かった聖家族の旅のように、この世界の厳しい現実には追い立てられたものとなろうとも、マリアさまとヨセフさまが、その現実の中に共にいてくださるイエスを手放すことがなかったように、私たちも私たちのうちにいてくださる主イエスを抱きしめて、決意を新たに新たな旅立ちをしたいと思います。その決意の証として、一年を締めくくる今日のミサを共におささげいたしましょう。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高